# 社會主義

ジョン・モーレー著
柴山由太譯

中庸堂書店

94
外久

# 序

佛國の經驗により列國の政治思想に統一主義を來たせし以來、社會上、附和雷同者は尊敬すべきものゝ如く、自信自說を有するものは蔑視すべきものゝ如し、主義者なるものゝ輕視せらるゝ、豈獨り社會黨のみならんや

佛ジョンモーレー氏の社會論を讀み感せしところを拙文に譯出せるもの即此書也

明治卅八年一月

柴山

明治
38 3 11
交内

目次

著者の人物

其一……一頁

意見と行爲
淬硬法に就て
壓搾する勿れ
意見と行爲と社會學說
合法調和と不合法調和
進化說に就て
變化の條件

實驗の證明
第二實驗の證明
其一……二八頁
一時的實用
宗教に就て
政治に就て
其三……四一頁
バークの政見
大改良と小改良
改良の眞義



教育條例に就て
社會の忍耐力
政治策と個人意見
社會上意見の主張
社會の良心
良心を稀薄ならしむるの害
歷史上の實例
其四……六〇頁
新側面の討究
自信と他人

二個の主意
自信と誤謬
信仰と偏頗
法律家の矛盾觀念
自由說と進化說
小心家の杞憂
物質と道德
奴隷史に就て
佛國史に就て
社會自衛性を會得せる効果
結論



## ○著書の人物

寒微より起りてナイトの爵を授けられ愛蘭總督書記官長に任じ、內治に外交に國家の機務に參與し、光榮ある英國自由黨の中堅として、名譽あるグラッドストン氏の親友として、濟々たる多士中稀に見る所の人物はジョンモーレー氏なり

余は玆に彼の政友マッカシー氏の記せるものに據り、聊かモーレー氏の人となりに就て考察する處を記す

マッカシー氏曰く、ロードリットンは、人生の二大困難とは貧乏と不運なりと曰へしも此二者を兼有し起ち、而し

て大人物となりし人甚だ多し、モーレー君亦其一人なり
と。モーレー君は讀書を好む貧書生に過ぎず、一新聞記
者に過ぎずと雖其人となりと事蹟とより觀察すれに、哲
學者なり、歴史家なり、文學者なり、政治家なり、博學
達識なるのみならず、其抱負の常倫に超絶するは彼の書
を讀むもの丶等しく知る處ろなり、高僧ニーマンと知り、
學者ミルに親炙する多年、其學問文章淵源あり、國民教
育論中論ずる處ろの如き、英氣勃々眼一世を空ふするを
見るべし

社會の幸福に必要なる條件として、實際上の政略を思



考する政治上の責任と、思想上の眞珠を探檢する智識
上の責任とを分離すれども、劃然一般に分離せざるを
上乘の法とす、他に助勢するものなくも實果を與ふる
を以て人を刺擊し其範域を擴張せんとする、傾向を有
するものは政治心の權勢にあらずや、以て事物の眞性
を埋沒せしむるものにあらずや、人類社會幸福の建築
の棟梁を崩して第二等の社會と下落せしむるに至りて
人類社會は、大品性を陶鑄する最も密接せる大爐鞴を
失ふなり、(一)人間向上心の自ら雀躍する大問題に眞實
の連絡を失ふ、(二)大膽なる答解の人心をして中に透徹

せしむるものなからんか、只不可知事として止むべきなり、如是の疑問は社會の機械とは干繫せざるものなれば、社會の機關手(大小官吏)等の與り知らざる處のものなるが故に、何處に連結せるものなりやを考ふるに至る

勿論政治心の塵芥に覆はれざる高亮の士は、大討究問題と其大結論あるを知らざらんや、然と雖、人をして自由討究の齎せる所に大斷定を下すを畏れしむるもの亦之の政治心の壓迫なり、たとへ彼等の樹立せる大見識は優に一世の前路を開拓するの勢力あるも、今は不



人望的にして疑はるゝの却て其勢力を失墜するに過ぎざるを知るが故、發憤して大探求を企圖するものなし。彼等は思へらく、顧れば人生極て短、滿足なる社會に使徒の來るべき要なく、才智社會に殉難者の必要なし。人は世界に小善をなすを至善とす、此善極て小、されど之を行はざる、道德をして自殺せしむ、地表の平和、淺薄なる人間の好意、此を壞つに忍びざるなり、豈皮相上面を掃蕩せんとして此を掊擊して可ならんやと目下に成果を得、即時に實利を獲らんとする常住なる政治心の釀成せるものにして、政治心の發達に伴ふて

益々盛なるものは右の如き、僞善者の自己的思想なり如斯思想に一々烙印するは野暮の絶頂、何んとなれば以て人間世界の成る同胞の一小塊と黙默の取引の結果たる僞善思想は一文の値なきものなればなり、然るに此社會に所謂社會の木鐸たる位置を得んが爲、自由討究の生得權、高亮の士に屬する義務等を賣りて、馬骨に千金の値を附すが如きことをなす、政治運轉手以外に僞善者彼等の如きものありて人心應用、殺活自由なる此廣天濶地に一種の制限を劃して、個人を萎縮せしめ社育を衰弱せしむるなり、何となれば、律するに一



個の主意を以てするにあらずして一般の制限なればなり。其立意を研究するの不足なる怠惰無識の結果にあらずして人心の大膽なる應用を畏れしむるものなればなり。害是に過ぎとするも此種の制限は、人生責任の鋭感を遲鈍にし、天に對し社會に對し個々の責任の感覺を痲痺せしむるの甚だしきものなり

吾人は古代の雲際に輝きたる火柱を見て、此種の制限甚だ厭ふ可きものたるを知る、遠大なる歴史の蒼天を見よ、人世を解して深く透徹せる嚴肅なる人格、高尚なる氣風を醱酵せしめたるものに、第十六世紀初代の

日耳曼、第十七世紀に英蘭、蘇格蘭にプロテスタントの産兒が堅剛なる人格的責任中に存せし大膽なる精神の如きものあり(ルーテルとクロムウイル)、吾人の眼底に燦然たる彼の英雄的英蘇の大清教徒を生せしめたるは、正義にして俗的固執にあらず、綿密に少數多數を算へて判せし結果にあらずして、造化翁の面前にて眞理を探求し眞理に服從せしが故なり

社會の今日の如く衰弱せる所以は彼の英雄的なる聖意の表現と、大觀念の自覺の沈滯せるに因る歟、然り、此氣や尋常の中に寓して天地の間に塞ると雖、人をし



て起たしむるもの他に存せざるべからず、プロテスタント主義の英雄に續いて第十八世紀佛蘭西哲學者迄は英雄の連續大々的飛躍。快之に如くものあらんや。彼等の智識上の責任の鋭感は蜂刺の如く毒を與へたりと雖、彼等の學說は邪なりとして今日の文士に屢々摘發せらるゝが如く陰氣にして不完全なりと雖、彼等の生活せし社會は甚だしき腐敗卑陋にありしと雖、一の目的を討究して害せられず、威嚇の迷惑、刑罰の苦痛を與へられざりき、ヴオルテル、デデロー等の猛人の陰氣なる怒號を止めしむる程の大眞理を探求し來るも又

報酬なし圓融無凝の境界にあらずや、大災害は來れり、眞なり、されど此の不幸の酵母は、國家の傳說と權力派の勇士にして自由解放派の兵卒にあらず、よし兵卒にありとするも、單に不完全なる一主義の罪にして自由探求を渴仰せる猛人等の觀念にあらず、亦其高尙なる觀念の振起に伴へる大膽なる精神にあらざるなり

吾人は之等の文を讀で小數多數を算る風塵政治を出でゝ靜夜に落花開花を算るの思あり

○、彼は一面哲學者の如しと雖、大理石の如き、ストイックにあらずして敏活なる經綸家なり、大策士チャンバーレ



ン氏が急進黨の牛耳を執り愛蘭問題に大手腕を振はんとせしキルマンハイムの約束時代にはモーレー氏は彼と提携して運動せり、マッカシー氏の言によればモーレーを代議士候補者に推薦し、盛に應援を與へしものはチ氏也。チ氏豈生れながらにして國權黨となりモ氏と相爭ふべき運命を有せるものならんやと

グラッドストン氏は始めよりモーレーの學問能力を愛して措かざりしはグ氏自ら言ふ所なり、第三內閣を組織するや、アバーデン氏の下に愛蘭總督書記官長として內閣に列せしめたり

當時愛蘭にバーチルと相並ぶ人物たるマッカーシ氏あり、マ氏記して曰く、英國內閣組織法によれば愛蘭總督に實權あるとあり、又書記官長に實權あるとあり、モ氏は實に後者に屬す、好行政官、措むべし加奈多鎭撫使の如き操權の自由なく、非常法を撤去するとを得ざりしと雖、仁政の精神を以て苛法の害惡を減少せしと大なりと

○自信力の非凡なる事、嘗て神學上の問題に大膽なる斷定を試みて代議士の競爭に失敗し、近世大政治家の一人なる職工演說家ジョンバルンス氏が議會に顯はれ、八時間勞働問題に付て國家の干涉を促し、滔々辨じ來るや彼



は之を掊擊して大に名聲を損じたりと云ふ、勢の至る沛乎として夫れ防ぐべからず、クラッドストンの大能力を以して尙彼職工演說家に勝を制せらるゝは當然の理勢なりと云ふべし

南阿戰爭起るに及んでは名士ジイムスブライス氏等と共に非戰論を唱へし等、一世の名聲利益を放擲する事破靴を棄るより輕易なるより見ればオチストジョンの綽名を博するに足る

○彼は經世を以て任ぜるだけありて有益なる著書多し

國民敎育論、ヴオーテル、ジデローと百科辭典、ルー

ソー、バーク、評論雜著、文學の研究、クロムウイル、ゴブテン、グラットストン

其議論の正大にして文章の勇健なる、讀史者をして一隻眼を開かしむべきもの、未だ彼の書の如くなるものを見ず、彼は實に現代第一流の文豪なるかな、此の人、千八百三十八年に生れ我にあつては翁にして彼れにあつては尙未だ壯、自由黨政權を取るの日は、必ずや好個の大臣として迎へらるべし、余其前途を知らず、已に大文豪として大政治家として、ビーコンスフイルト卿、リットン卿と共に永へに英國史に存する人なるを知る



# 社會と個人と義

ジョン、モーレー著
柴山由太譯

## 其一

○凡々社會の根柢は遠き大古に始まりて復雜に成長發達し來り、單純なる組織にあらざるが故、社會上の意見習慣組織等、各其實際に適當なる要素ありて其存在することを得るだけ存在す、故に事實に適合せざる固陋を憎み誠心眞理を愛し鋭意眞理を探求し、意見を樹て信念を立

つると雖、單に意見たる間は他人に對して責任なきが故、獨立獨歩何の妨げらるゝなきも其意見を生活の實際に適用せんとする、必ずや狐疑逡巡するに至る、其意見習慣組織等現在を維持するに足ると雖、消滅の期ありとして止むべき乎、否是れ眞理の半面のみなるを奈何せん新眞理新意見を熱心なる傳播主義を以て、社會に通徹せしめざるべからざるの理あり、然と雖、一方の風土より他の風土に、植物を移植せんとすると古來生存せる位置にて盡滅せざらしめんとすると孰れか易き孰れか難きを知らざるべからざるなり



○偖て、七歳の小兒等も次代の相續者にして、古參兵が死地に狼狽せる間に次で新兵の至るが如く、社會の傳說傾向可能力等、古より新へと相傳て、嘗て絶ゆることなきは社會の眞相なれば、通常時代なる語を以て物の番號を呼ぶ如く、何々時代と恰も個々なるかの如く用ゆるは謬見なり、社會の因子と元素とは無窮の間に存在して更らず新陳代謝して存す、故に時代とは多くの時代なる事明晰なるものにして只其中に、進で新眞理の旗を握ることを得る力量と、崎嶇羊腸の途を通するを得る忍耐力とに多少の割合あるのみ

○然るに元來人間は社會の一種凝固せる精力に抑へられ、自利的關係の集合物に制せられ、愛と戀と物質との慾情に心を擒把せらるゝ等、人生の大半を滿たすの材料なり此事を記臆するを肝要とす

男女の社會に在る喫茶喫飯、課業は生活の課業なり如斯幼稚なる主義の下にありても、彼等は山にあらず、水にあらず處世の險にありと云ふ、然則ち時代に先ちて來れる討究的智識より成る新理想の範疇に社會を從屬せしめんとする、必ずや人をして實際に適せざらしめ、社會分裂を促すの弊あるものなれば、緩緩に其組織と信念とを



拂抵し、遲々たる法を以て當面の問題を變革するの覺悟を以てせざるべからざるが故、人生大半虛妄を以て滿たさるものなるに關はず、遂に忍耐力を消失して時の可否を論ずるが如きことありて可ならんや

○近世思想家中有名なる人の言に

過去社會の狀態には適當なる理想組織等は、今正に膨大しつゝある處ろの新社會の理想組織等とは一致するものにあらず、故に新社會が新組織を確立するに至る、遂に自ら隱れ去るに至るべきも、其れ迄は新社會中に生存す。

其間必ずや新理想と舊制度との衝突、人の思想と行爲との矛盾等あり、尙之を社會の實際生活に移さんとする、新者の準備の完成せざる、必ずや依然舊者は其位置にあり、此れ萬古不易の調和にして、正式なる社會發達の必要條件として缺くべからざるものなり、如斯く連續的に成長發達し來る連續せる變化を通じて進行するは社會の性質なるが故、其國民固有の組織行爲信仰等を統一せんとする調和策は有益なるものなりや、余は有益なるものなりと確乎として斷言するを得ずと



○吾人は此等の議論と其に屬せる感情とは止まる所に止めて、以て甚だしく人心を壓搾せしめざるを可とす、何となれば人間の偏曲にして且安閑無事を欲するの底に、最も自然的なる危險の伏在するものあればなり、

茲に引用せしスペンサー氏の、新社會は自ら其理想を制定すとなすは、此男女が自ら理想を設け、將に去らんとして時の熟せる古代の理想とは特殊の關係なしに、新理想を受用する時ある事を意味するや明瞭なり、舊思想保存を主張して有力に固持するものあらずんば新社會をば常に其理想を以て建設し得るものなりとなす、是れ調和

なるものは事物の自然的狀態分離力の攝取として論述し而も實際施行すべき條件と制限とを定義せざるなり

○行爲の主義を根本的に論究するには直接に間接に比擬證明と直接觀察との二者即ち、天則學と社會結合の法則とを總合せざるべからず、哲學的冷淡者、主義の成果に對して無經綸なるもの丶辨解となり、萬里一條の鐵車あるも趦趄逡巡たるもの丶申譯となるや否や、行爲の主義を社會學に就て論究するは最も肝要なるものならん



○今や社會の進歩は確然有機的成長と觀て過ち無きが如し、渾て其邊面中の活力は理想と組織の變化の連續を以て成る、此等の變化は社會內外の事情が全體に運動するより生ず、理解、感情、欲望等は常に私事、政治、經濟上に活動す、宗教の感化を受け、互に衝突して互に循環す、凡て此等の元素によりて活動するものなり、圓融無凝、正式なる行路に進行しつ丶ある社會に伸縮あり、交互動作あるは、社會の生存せる表示にして眞性なり、社會の進歩は社會眞個の理想と開發的法則とのために、傳說と習慣が新に適用せられ、又再び適用せらるる長程に外ならざら

は明白なる事實なり、實際に指示し得る社會形體上の變化の弛癈し停止せることある時、即ち靜止の時代なるも變化力は只潛在せるのみ、而も社會構造の化骨し彈力なきに至らざるに先じて變化の精力を復活せしむれば更に進歩するに至る、文明史とは事實に最も適應せる新思想が舊思想を排除せるの歴史なり、古代の法則と生存法とが、人類の需要を直下に增大し滿足せしむる大便利大能造力ある新者に變遷せるの歴史なり

○前述の進化想に適合せざる見解を以てする調和に二あ



り、合法なるものと不合法なるものとあり、其主意に亦二あり、妨害的なるものと然らざるものとあり、不合法なるものとは即ち一の問題に傳説的理想と一般の偏情とを合成せんがために、他の理想を抑制し殘害し或は未だ時代の人民が新物採取、即ち應化の豫備なき事實に屈伏するものを云ふ、此種の調和者は高尚なる眞理を放下して己れの眞理を隱蔽するものなり

偖又他の一方の調和者は全世界をして直下に新智識に從ふべきを强へずと雖、其を以て自れの旗色標號として大膽に保持す、不合法なるものは偏情の統治を長久に延ば

して進歩の到來を障へ、合法なるものは極力偏情の境域を縮少して他の理想を入れ其を確立せんとするに急なるも、新智識に未塾なる人間の暴動を避けて急劇なる變化を主張せず、合法なる調和者は、現時に刷新を斷行し偏情を拋棄せよと强へずと雖、少くとも一人の偏情を去り亦事實を隱蔽せざる人あらん、社會進歩の緩慢たる此れ余の過失にあらずと曰はん、不合法なる調和者は曰はん、余は汝をして余の眞理を受用せしむるを得す、故に汝の非眞理に屈伏するなりと



○前の區別は前述に明截なるが如く、社會進化論にも亦穩當の區別法たるを得む　思想と法則との變化は自然的に來り自然的に成果となるものにして、人の變化を企圖するを許さざる變化によりて進歩するものなりと云ふ社會進化論ならんには、天下奇怪なる論法の第一ならん、誰か之の自然的なるものを以て、此ものは人間の力行と意志以外に獨立せるものなりと解するものあらんや是と反對に社會上人間の精力は自然的元素の一にして、一般他物と等しく缺く可からざるの要素なり、社會の進歩は社會の傾向と理性力とに因ると雖、傾向と理性力と

の機關を代表するものは、即ち此社會の男女間にありて、他の那邊に至るも決して見出し得るものにあらざるなり。若し吾人の全體が一時代夢想鄕に入り醒來れば果して完全優美の社會を見ることを得る歟、此意義に於て進歩は自動的にあらざるなり、世界の善く其成長の難き部分に於てすら成長するに至る所以のものは、之を欲する人間の正當なる步調をとるあればなり、進化なるものは能動力にあらずして運行なり、原因にあらずして法則なり進化學は社會の淵源を明かにし、社會精力に就て確固たる制限を劃すと雖、社會精力其ものは決して進化作用に依



て排除せらるべきものにあらざるなり

○毫も讓步する所なき大覺悟を以て此紛たる社會の妄漫に一刷振を加へんとして努力せざる人々の、只權利を以て社會を結合する、必すや不實用なる技術的なるものなりとの叱責は、事をなすに當りて妄漫惡習等は自ら消滅するものとなす輕信家――異なる人々に的中せり、此の輕信なるものは其等の妄漫惡習を包有せる自利主義にて多くの團體の結合せらるゝ事を看過せる、怠惰無識至愚者の標示なり

ベンザム曰く、相當の理由なく自れの利益の形骸を膨大にせんがためには彼等個人又は一階級のものは、其彼等の犧牲とするものを有せざるべからず、全體の利益のために個人の利益を犧牲にせんとするも亦同じ、人間團體の一部又は個人の一部が妄りに如斯犧牲とせらるゝに至らば、此政策に挑源卿なる術語を用ゆるの不可なるなしと雖、餘り技術的に過ぎて實行に不可なりと如斯犧牲者となるを欲するものは誰ぞ、第一此世界を或る神秘又は自動的社會發達によりて進歩するが故、現時に生殘れる組織と毫も正義とすべき所なき人類關係に對



して連續攻擊を行ふを必要とせざる、進化論を誤解せる人なり

○自利主義の暗雲が吾人の目を遮るなく、社會の眞哲學が誤用せらるゝなからんか、事物の活動を赤裸々に觀察するを得、社會の進歩は變化して進歩する其方式に依て正式の線路を進むのみ、而も此等の變化を始むるものは一個人或は小數者なり、進歩的傾向は唯進歩的傾向に外ならず、特殊の進歩的理想の產出せる人の手段によりて四圍の牢乎たる障礙を排して其途を開くのみ、其等の理

想は原因なく條件なく大虛空より奮出し來りしものにあらず、此物や完全なる機關を具し整然たる前緣を有し、過去と直接なる關係を有せるものなり、此が一般に來らずして一人或は極めて小數者に自現せる所以は、其場合あるのみならず大通曉力なかるべからざるが故、如是の理想の途上にあるもの少きなり、社會進歩の事々物々皆一般にあらずして、其牛耳を取るもの一人なる理由は、一般よりも先づ其人は改革せざるべからざる事に直接に接觸したればなり、或は其人は稀有の太智識大活機の人にして思想上民俗上如何なるか是れ幸福、如何なるか是



れ至適なるかを眞面目に思考せる人なるに外ならず、實際上にもせよ思想上にもせよ孰れにしても新理想を有せるもの其說を詳細せんより先づ他の需要に應じて一定の言論に現さゞるべからず、知行合一主義に與望の來るは實驗上否定すべからず、人は言議し行動すべき事の刹那に、直言敢行するの勇なくんば、深遠なる見識も其成果を得ること少かるべし

○論じ來れば直接に吾人が急務の問題となるものは眞理の所有者なり、社會進歩の因りて以て繫る人は彼と、又

彼の如き人々に外ならず、若し彼にして沈默せば社會の修理は茲に止まりて、信仰を腐敗せしめ組織を荒廢とす有害なる元素は、依然として社會を崩壞すること恰も莠稂繁茂して瘦土となり、毒の身體を衰弱せしむるが如し、故にたとへ心中安逸を欲するに過ぎずと雖、社會に一刷振を與へとするものの他の一般に先じて辨じ、他に先じて雷同附加者流より獨立するは以て社會を格律せんとするにあらずや、然るに答て曰く、たとへ結局は全體動くべきも古代の巢窟を出るもの常に一人なるが如しと、此れ豈眞個の辨解ならんや、調和者の格言にして健全な



るものならんには以て一般に應用せしむべきなり、彼が他の適用を許さざるものには彼に眞個の辨解をなさしむる權利ある者なし、一人に眞意見を隱敝し曖昧模糊の雷同附加を事とする權利ありとすれば皆其權利を有す、遁辭の法は彼と此と同一なり、然れば調和者の事業は妻を娶り馬を購ふと如しく一人の適用に過ぎず、又其辨解は饗應を受けし客の一人の禮辭が、皆他のものゝ禮辭と同樣なると如しきことを證明することを得、此等の答解は無覆藏なる質問に對する正々堂々たる答解にあらず新理想を抱持せるもの共々、此調和者の辨解を借り來りて其

例に倣ふとせば前途知るべきのみ、誰か敢て先登第一の勳功を立てんとするものあらんや、此社會は依然として吳下の舊阿蒙なるのみ、汝は有力なる黨派を組織するに充分なる同意贊成者の來る迄待つ歟、然れども、古巢窟より出でゝ新眞理に密着し以て個々各々團結せんとするもの幾何ある歟、幾人にして有力なる改革黨を成立し得る、敎會に出席する一半が不信者なるによりて出席を止め、僞信者の三分の二に至る迄待つ歟、其戒愼の行爲の一時的道德に附加せる分あるを認むると同時に、敎會をして暗黑界に埋むる其暴漫虛僞が、極點に達せるを注意



するに至らば、眞理の進行を妨害せることの如何に大なりしかを觀測せよ、終に可怖大震動を以て變化の來れる時、其接衝の任に當り得るものと曉天の星と孰れが寥々たる加之、亂麻の如き繼起の事件あるを憂へよ

○調和者の畏るゝ處ろは其獨立して進むを懼るにあらずして其進步的理想に對して凱歌の一日あるは期して疑はずと雖、時の未熟なるを想ふが故なりとせん、此辨解中には全く異れる二個の狀態を含有す、(一)何事に對して時は未熟なる歟、結局理想に於ける變化を包含する處ろの

生存法又は組織の實驗變化に對する時の未熟なる歟、(二)安固なる法を以て實行するには變化の必要を主張する社會學說の範疇に可成多數の人間を網羅せざるべからず、又新理想を傳播し向上せしめ勢力を與へざるべからず、一人にて此事を遂行するに對するの時未熟なりと云ふ歟是れ前者と全く異事に屬す、時は前者の爲には未熟ならん、時季は吾人の實果を獲得するには充分ならざるべし、然れども時の來りつゝあるは常住なり、枝々滿果の理想を報告するには時季は決して未熟にあらず



○吾人は更に進で論せざるべからず、社會が一人其成果の理想を報告して彼の隣人を害することなきが如きに至らば、時は常に理想の成果を擁して來ると雖、其一人が生存法組織等の變化を遂行せんとする、必ずや多數の向上と協力とを要す、然らば其同意協力を已に與へんとしつゝあるは那邊の人なる歟。是れ疑問に屬すること明白なり、然と雖、其變化の必要たる所以の說明と其適宜の法とが常に適用せらるゝなきと雖、時も道理も決して未熟なるが故にあらず、新理想の一人を抱て來るは大氣が新理想に滿てるの標示なり、改革家も保守家の如く時代

の産兒なり、異教も正教の如く前緣の事情と直接に連關せるものなり、ベーコンが眞理を時の娘とは善くも名けたり、原種なくして奇蹟的に新理想の奮起することなし、若其新理想の余に來るある、必ずや今其が來りつゝありしを見失へたるもの他にあり、若余が長安の大道を發見することもある、必ずや、他のものは余の隣人に續いて連絡せざるべからず、即ち發見せる余は彼等の目標となるなり、新眞理新智識彼等は之を發見せんとせざも受用せんには用意あり、然則ち多數の受用せんとせざる事實あるを以て、新眞理の所有者は彼に點ぜられたる燈火を升



の下に隱さんとする理由なし、よし未だ新理想は彼等に來らずとするも彼に來れり、隣人の變化の用意如何は知り得ずと雖、少くとも彼は左の確固なる事實あり

(一)彼は變化せんとせること、(二)其事は善且利なりと信ずること、(三)請ふ隗より始めんと云ふものなくんば成果なきは確なること、(四)彼が先づ一部を擔はずんば敢て擔ふものなく事は其所に放棄せらるべきこと、調和者なるもの以上の點に就て自ら盲目者にして可ならんや、彼自らの意見に眞理なしとせるかの如く、理想に就て苛酷なる殘害を加へとする人々に同意し遂に其を以て己れの理想

となし新芽を摘み蕾を取て可ならんや

## 其二

たとへ此現存組織を修理して尙未だ一時的に有益なる職分を致さしむるを得るとするも、人々の實際に考ふる所は此點にあらず、即ち改善を實行せんとするも輿論の未熟なるに於ては此組織の變革し能はざるは勿論なれとも改善を苦策する人の變化は全く要なく、又之を欲すべきものにあらずと思ふかの如き言動をなすは毫も理由なかるべし、信念や社會の組織や生存の法や、一時的の實用



を認むる人、其實用のみを認めて同しく緊要なる其一時的なる素質を忘却し去りて可ならんや、其一時的なる事實の素質を認めし人々の自ら革新の任に當るは實際の理由あり、自ら革新の任に當りて演說や投票や行爲等を以て新眞理の實行に意見を樹つるは可なりと雖、吾人をして時間的に有用なることゝ憶はるゝにより、其が永久に有益なる乎の如く行動せしむる勿れ、社會の刷新は進取力行に待つこと大なり、未來は大洪水なる絕望的格言を以て事の現狀に滿足し安閑無事を求むる自己的なる人間は、未來は黃金世界なる怠惰至愚の希望を抱き其を以て

實際の世界觀となし目下の安息無爲を樂まんとするものと孰れが優り孰れが劣れる、洪水を治めんせずして努力するなく、黄金世界を促さんとして勉めざる人も同一なる道德線上にあり、前者は其標榜せる主義以上に惡からず、後者は深遠なる樂觀にも又深遠なる悲觀にも共に固有なる僞望、其僞望を裝ふのみ、否彼は其蜃氣樓を畫へて以て特殊の改良事業に執着し煩勞せるものを濟度するの効果あり又德ある、一般の人類改良に就て熱心なる行動なりとなすが如し、笑ふべきの至りならずや



○若し己成の組織を好く運用せしめんと欲するならば又其を維持せんとせば一層運用を善ならしめんがため、其が果して成果を得るに堪ゆるや否を疑ふて其を叱責するを以て、道理ある事とすべし

一例として茲に基督敎會が種々有益なる事業を致したるは彼等が團結して善事に熱心なりしが故なりと假定せん、然りと雖、吾人は彼等に向て事は之れに終らざるを告げざるべからず、何となれば若其敎理の眞理にあらずと論破せるものあらば、正に增加しつゝありし多數も或は眞理ならざるかを注意するに至らん然らば其根基たる精神

的生活の効果は其信仰と比例して降下す、然則ち教義も教會も更に高尚なる信仰の儀型を以て徐ろに改善を謀らざるべからざればなり、官吏や教會の維持者の如く多數をして此れ人類社會の天職なりとの見解を抱かしめざるべからず、而も其途に在るもの單に人民の義務を放棄するを奈何せんなど丶辨解し、奇怪なる彌縫策に腐心するに過ぎずして可ならんや

◎若し正教は一定の範圍時間の需要を滿たすに過ぎすとせば、未來の需要を濟するものに異教なかるべからず、



然則ち彼等の辨解せんとする處ろを點驗し來れば左の如けん、現在の組織は其位置に於て他の組織を以てなし得るだけ完全に運用しつ丶あるが故、言議行動を以て干渉するの要なしと、如是の所信あり如是の行動をなすものは人類社會に於ける堅實なる保守黨と云ふべし、若し人にして此境界に安住し其合致默從惰性等が化して甚だしき過とならずんば僥倖なり、故に此組織信念等完全無缺たるものにあらずんば、たとへ彼等は其救濟の能力と其時機とを有せずとするも、其缺點を指摘して彼等の注意を喚起するは保守黨以外の人々に屬する義務なりと云は

ざるべからず

偖又吾人は其一時的實利を現組織に歸しながらも通俗學說、舊來の宗教、立憲政體、小數共和政治。此等のものは惡事なり下等の形式なりとの幾多の議論に就ても辨せざるべからず、彼等の惡事なりと云ふは、一種の阻害を齎すとか貴重なる利益を失ふとか一々分類するに外ならず、事實は此れなり即ち彼等の職分を健全に遂行せること、其遂行せる如く、彼等の職分の根本的弊害缺點を殘留せること其殘留せるが如し、只分類して以て何の効あらんや

若し現代の學說を以て至善の大道人格的大觀念を破壞し



智慧を制限して狹隘となし、宗教上の想像を誤解して人を活動せしむるの力なしなどゝ一々算ふることのみならば、若其彼が算へし害惡を一掃するの勢力あるもの忽ち回り來らば彼は如何せんとする歟、其通常の超自然的思想を全然虛僞なりと信せば奈何ともすべからずと雖、若し善良にして害惡少しと信せば如何、尙害惡を探求して一々烙印することをなす歟

⊙前論を明確にせんがため、尙假定として英國立憲政治に就て論せん、現任首相によりて嚴重に執行せらるゝ英

國憲法は一の職責を有すと雖、若し英國今日の文明は他の一般の事情よりして到達せる一の階程に過ぎずして立憲政體の効にあらずと信ぜんか、帝政なるものは妨礙、害惡、又單に裝飾物に外ならず、裝飾的帝政は貶黜の慣例を惹起し、下等なる社會理想を培養し、社會上高雅なる自尊の氣風を減少する等種々なる害惡を釀成す、然則ち帝政思想信念の民俗に存在するを掃蕩するの機を逸することなきを注意するは確に吾人の責任なりと雖、王座と王冠とを政治上の骨董品として博物館に移さんと苦策するかの如き行動を許さず、吾人は自由の民は常に適當なる



善政府を有することを得るとの光明正大なる主義に於て其等の方面に實際的急務を有せざるなり、此假設上の吾人の自信は帝政なるものは當然、英國より掃蕩し去るべきものなりとなすにあらずして、帝政なるものは社會の大精神上有害なる元素を釀成するものなりとなすにありなり而て此自信を表白して以て、朝に存して野に蔓延し更に大に瀰滿せんとする賤劣固陋の元素(御幣擔き心)に、行爲にも觀念にも汚染せらるゝことなきを期し、此等賤劣固陋の元素と此元素の產出せる行動とを輕蔑し排斥すべき、正當の態度に輿論を指導するは吾人微力なりと雖。

全力を以てせざるべからずと云にあり、是れ帝政の不利なりと認めらるゝ部分の害毒を減少するの効果あるが故、帝政の利益と衝突する所なしと斷言するを得、吾人は帝政を顚覆せんと企圖するものにあらざれば此問題に同意賛成を得ると雖、適用せんとするものにあらず、吾人は意見上の活動舞臺、豫備の舞臺にあり、行爲にせざるこそ實際の道理なれ、只吾人は人をして吾人の主義に固執せしむるを得ん歟、此固執とは極めて小心極めて俗的性質のものなりと雖、通常外部の同意協賛を要せざるを多とす、成効の歷史は幼年の歷史の如く、人は決して屢々



自ら繰返すを得ざるなり故に謹愼の態度を以てせざるべからず、歷史の大半を滿たすものは君子の徒の爭論を夢にだもせざる些々たる偶然の事より、時代の大精神に反抗して動搖せるの歷史にあらずや

○マコーレー曰く、ハレフイキスは强固なる共和主義者にして其思想を表白せり、而も彼は朝廷の爲に戎軒に從ふて自らは歩一歩貴族たらんとする間に、世襲貴族制と君主制とを以て痛快なる彼の談笑の題目とせりと、吾人は彼の如き光輝ある品性を有せる人も然らざる人も知る

こと多し、生存法や品性や社會の組織や此等に就て高尚なる理想を扶殖せんとして實際の經營を策する人其等の高尚なる理想を忘却して可ならんや、然則ち若し實行の指南車となり、現在經營の目標を立つるにあらずんば、人は其理想の目的の那邊にあるかを知るに苦むべく、一層實在たらしむるの進行なくんば、高尚なる而も理想的なる觀念も無意義のものなりと云はざるも淡として水の如しと云はざるべからず、若し一の理想にして現存組織と衝突する一點を有せずんば恐らは智識上精神上無氣力自棄の結果に外ならず、若し一點衝突する所ある、必ず



や彼の希望に一分の成効あるべし

彼は新教を以て舊國教に換ゆる能はずと雖、少くとも、理想の極致は古代の形式に盡きたるものにあらざるを示して戀舊心を轉じて之を進行せしむるを得、彼は立憲政體を變じて共和政體となすことを得ずと雖、少くとも、一國民をして共和政的道德を狽はしめ彼の蒼生をして賤劣固陋の俗禮を蔑視せしむることを得

## 其三

○人民の改進主義を顧ず、不道理なる主義を以て、佛國

革命の宣誓せらるゝ數年前、バークは曰く、政府なるものも自由なるものも、共に論理的理論の定義より來れる抽象的主義と如しくせんとするは大なる謬見なり、凡ての政府の根基は調和と交換、相互の不自由を權衡し與奪するにあり、人間の幸福、歡喜、道義、恭敬の行爲、加之、人を利するに己れの權利をも棄つるを敢てするに至るは皆之より來る、人は到底自己の利害に關する動機より行動するも哲學的思辨に因りて行動せずと

偶ま此語が、己れの安逸を愛する心に的中すとなさずして眞個の意義を會得せば智慧の言眞理の語なり、思ふに



此語、佛國に於は新聞の第一面に大文字にて掲げ、政黨の事務所内閣の官署の戸扉に金文字を以て書き置くの値あらん、英國に於ては調和と交換とは一定の主義が絶對に勝利することにあらずと雖、兩個の主義の孰れをも安固にせずんば各其不利益とならんとの第三者の見解を以て、兩定の主義を寸斷せんとするにもあらずと云ふ、如斯平易なる眞理を闡明せる註釋を要す、理想をして其適用せんとする所の情況を顧みず、遠方なる理論の定義に從はしむる勿れ是れバークの眞意義なり

他の事業に技術ある如く政治にも技術あり、以て用をな

すに適宜なる物質の量を權衡する智識と、物質を處理する智識とは政治上の要素にして、是の智識なくして政治を掌ることを得ざるは明白の理なり、又小變化によりて改良進歩せしむるの技能なかるべからず此れ保守説一面の眞理なりと云ふべし、理論上の全備を追ふて急なるものは政治家の處理する處ろの社會の建築材料に關する知識なきを示すもの、思想や組織や有機的變化の不足なるを憤慨するものは頑迷人、たとへ變動するに難からずとするも屢々變化を希ふものは蠻勇人なり、小改革は大改革の敵なりとの語は不幸なる佛國の語なり



○然ども、此の語中に深遠なる眞理の意義あるを知らざるべからず、若し一社會の掌中に二個の改革を藏し、第一の改革を第二の改革の目標と同一なる線上に行はずんば、一時的の小改革は實際永久的大改革の妨害となるべし、大なる進歩的主義と更に其目的を擴張する見解を以てせざる小改革は、再び改革を要する時に當りて其正當なる線と目的とに挽回の策なからしむ、英國の立法府は此種の實例を示せり、世人の熟知せる處ろの、千八百七十年の教育條例は其性質たる實に小改革にして、此の最も難問題の最後の解決なりとなすもの一人もあらざりき。

然るに政府と其背後の政府黨とは相連合して變權的に主張して曰く、此の條例は既に沸騰せる輿論の大提案なりと、遂に個々撰擇的なる單に名義上の法則を實施するに至れり、若し他日國民の要求が眞に適用せらるゝに至らば、此等名義上の法則は當然國法によりて改正せざるべからざるものなり、國民たるもの如何に此事の困難煩勞なるも、此一點は心中固く銘じ置かざるべからざる也、然るに此と反對に此法令の執權者は結局放棄せざるべからざるにも關はらず、此法令の目的を到達し其權力を强固にせんとして徐ろに準備を始む、是れ小改革の未來の



大改革の實行を困難ならしむるものにあらずして何ぞ、是れバークの意味する調和と交換、與と奪とにあらざるなり、單純なる論理的理論の定義と相合致せず、常に此現在組織と干繫衝突せる、最も不適不便なるもの即ちバークの眞意義、眞政治家の會得せる調和と交換にして、一手は以て一組織の死刑の宣告書に捺印する爲ねし、一手を以ては新社會の爲めに力量を與へつゝあるものと、其意義甚だ異れるものなり

○前述の如く、第二の改革を困難ならしむる小改革は、

如何なる問題を何所に表影するも、到底害惡のものたるを免れず、此等の害惡は社會を退歩せしむる憂なかるべきも、實施し又實施し幾度實施するも効果なき所に人心を滿足せしめて、嶄々然として斷行せざるべからざる事あるに當りて、人心を喚起し、新力量を振興するを困難ならしむるは明白の理なり

○論じ來れば爲政術の基本、調和の意義を知るは敢て困難なるものにあらず、時間が一回の改革をなすより外には決して吾人に改革の機を與へざる場合に於は其一回の



改革をなさずと云ふにあり、然り此最後としての一回を取れば希望と努力とを棄つることとなるは、たとへ事實にはあらざるも事の結果として　歴々見るべき也、或は其一回を實行して其誤過を修正せんか、終に益なき彼と此との距離の議論に過ぎず、此等の意義孰れにしても小改革は大改革の敵なりと云ふべし、然りと雖、社會の秩序と進歩とを合致せしむる條件を定め、實驗の明智を根基とせる善政略思想を以て、保守家の賢なるものには彼に害事の到來を怖れて小變化を贊成せしめ、改革家の智あるものには彼が絶へず大改革の方向に進みつゝある間

に小改革の機會を捕ふるを得せしむるにあり、全局面を概觀して其細目を審かに辨知せざるの弊あるものは改革者歟。全體と邊涯とを矚るを得ざる近眼病者は保守家にあり、故に此等の政略を實施する間、兩者に最後の理想を示して指導するの技能を要す、以上論する處ろ或は調和の眞義に庶幾からん歟

○若其進行の甚だ遲々たるの感に堪へざるや、性急なるが故なれば宜しく過去を回顧して、理想中の變化の實現して成果となるに至るに巨大の時間を要せし所以を觀て



其心を修正すべし、社會の變遷、國家興亡の跡を談するに僅々數年に過ぎざる時間なるかの如く、一定の限界を劃せる語を以てす、曰く撰擧法改正、曰く穀物條例廢止、曰く英國大改革と恰も一時的なる名稱を用ゆるは不可なり、英國大改革とは三世紀の時間、北部歐州人の心の動搖せし名稱なり、歷史の紀元を定めし基督敎の勃興樹立も、常語によれば半世紀内外に成立せりとなすが如し、されど此敎義の大構造の基礎を造り其れを整然たる有機體となせる迄には確に少くとも四百年を經過せるなり、又英國大革命や基督敎定立と比すれば稍や自然の理性的

なる東邦帝國の變遷、即ち古代羅馬の統一よりベザンチンなる特殊の名稱ある、新羅馬に至る迄の有機的國家の變遷も二百年を經過せり、如斯復雜せる運動、牛歩的進歩も語勢によりて簡略の名稱を用ゆと雖、決して綿々連續する事件を一個の事件と概略すべきにあらざる也、然らざれば、吾人は人間の事業にて最も感銘すべき邊面を認むること能はずして歴史の實體を失ふべきなり

加之、短命なる人間より見る時は歴史上の變化は地質上の大變化の如く、長久なる時間を經過せることを記臆するにあらずんば、實際上の教科として高價なるもの、即ち



社會の忍耐力を失ふに至るべし、動植物の種屬が最適者として顯はるゝに至りし迄潛在せること如何に久しき乎之と等しく、理想も組織も最適者の顯はるゝの久しきだけ存在するも、鋭利なる陶汰の作用によりて遂に新者の勝を制するに至るなり、歴史學は地質學の如し、想像を以て研究せざるべからず、温古知新の學は、未來が吾人に對して藏せる變化に就ての概念を作り、其が成果を得るに要する時間と、努むべき力量とに就て吾人の度量を弘大ならしむ

○右は協和を以て成立する實際上の政略に關する事なるが故に其論如斯、然と雖、個人として政治上社會上の意見を發表するには毫も荏苒することなきを要す、若し斯民の生存上に實行して不可ならず、而も一部の人の以て善意見なりとする滔々たる俗流に一地頭を抽んずる高價なる意見を有するも、社會の叱責俗的喧囂の聲を避けんが爲、しかく尨大なる壯圖を棄つるものあらば、其人は一皿の雜煮のために生得權を賣るものにあらずして何んぞ、社會の非難が發して吾人の思考希望を絶對的に壓迫せんとして來り、小膽にして只殘害せんとして來るも、



吾人は最良なる自己の命令に服するを畏るゝ、變化を以て獲得するを得る利益を失ふのみならず、社會の良心を維持し尙其を增加することを得ざるべし、而して良心の增加せざる社會にありては災害の多きを了解し得ざる人なからむ、社會の進步、國家の發達は單に社會道德の格言を改善し、其意義を高尙優美ならしむるに因らずして、猶其道德上の觀念の活動に由る、一個獨特の人格品位ある大敎師は學說を改良せず、如何なる學說を執るも大なる盤上に之の觀念を活動せしむ、彼敎師は尋常茶飯の間に要する人の道念を振起せしめ、人を刺擊して活潑活地

たらしむるの技能を有す、道德や義務や聖意や情緒や同情や協心や大望や、此等のもの人間多數の中に瀰滿し議論以外に超然として獨立せるものなり、此に因て是を觀れば義務の觀念は其品質は依然たる因子に相違なきも、其分量は始終增減あるものなること極て明白なり。異れる社會、同社會にして異れる時代に於て之を觀れば良心の容積の多大なること、微少なること、あるを知るべし、而して社會の衰亡の直接の原因たるものは道德の衰亡なり、其道德の衰亡する直接の原因は倫理學の邪惡なるが故にあらずして良心の量の減少せるに因りて道德上



の感覺を遲鈍ならしむるが故なり、希臘の腐敗し衰頽せしは何故なる乎、倫理學の缺乏せるに因りし乎、否らず倫理上の義務を守りて力行し、活動する人の缺乏して零なりしが故なり、若し玆に、他の總體事情と隔離して。只道德上の事情のみを以て觀察すれば、東洋又は西班牙に於てマホメット教は基督教を征服せり、此れ彼が義務の觀察に高尙なる見識ありしが故にあらずして、義務に對する注意が最も猛烈に最も熱心なりしが故なり

○義務の觀念は決して節約すべきにあらず、此貴重なる

元素は之を社會に藏めて自由に活動せしめ普及せしめざるべからず、然して社會上意見政見等の壓伏せらるゝ其度數に比例して社會良心の量の減少することは算數の理、極めて明白の理なり、然則ち抑制を是とするものは此元素の重要なる所以を知らざるものなりと云て可なり。されど此良心を稀薄ならしむるの害惡より甚だしきは、一人の以て自ら幸福なりとなす觀念を、社會の一般に强行せんとする害惡よりは少なれば、社會上其主義の全條中毫も私的の條件なく、尙他の法律上の權利と衝突する所ある以上は、如何に彼等の良心が堅固なりと雖、之を論



難攻擊するの要あり、されど此等の觀念が此種の不法なる干繫なくして發現せる時に當りて其に妨害を强行する程、人類社會の骨子たる良心の勢力を剝ぎ又其量を減ずるの甚だしきものなし、兩手を以て社會道德の原種を風中に撒布するが如きなり、此事業をなせし歷史上有名なるものは、ナントの法令を廢止せし、ルイ第十四世と。千七百二十四年に於て尙一層殘酷なる法律の主權者なり。此等の人は只に佛國人中小膽なる部類の徒輩を猛烈に海外に放逐せるのみならず、薄志弱行の輩を打て一丸となし以て正敎の下に置かんとして、詐術賄賂は隱然として

風をなすに至りき、此れ良心を財物視したるなり、吾人は若し彼等が相互扶助主義なる眞新教の兒にして、個々の責任を重ずる習慣に訓練せられて成長し道心堅固たるもの有らんには、ナントの法令廢止後一百年間、暗雲佛國の天を覆へし時、大なる力量を佛國に與へたるべきを疑はざる也

## 其四

○百尺竿頭一歩を進めて新方面を論ぜんと欲す、吾人は社會進歩の精神を自斷せる如く、一轍なる社會保守主義



に應援して無意識的に辨論せるものゝ如く曖昧なる主義者と見へん、吾人の主義の全體を表白すれば此二者を分割せんとして來りしに外ならず、若し改革者(社會主義者の如きもの)にして沈默し戒愼せば何故に社會調和を保つを得る歟、何故に勢力を以て壓し沈默せしめざる歟、若し異教の以て彼等の正義とする堅固なる自信によりて行動し說法するを不調和物とすれば、何故に正教徒が異教は全く不義なりとする堅固なる自信を以て、異教の觀念生存法を打破せんとする其覺悟は不調和物にあらざる歟、答て曰く、空洞なる調和は異教にも害なるが如く正教に

も害也、眞理は至誠と徹底より來る一方猶他の如し。然るに抑制主義を持するもの丶主義者相互の切磋琢磨を非として絶對的に抑制せんとするは何ぞや、余が此論の主意は兩々自ら主義とする所に密着し研究し實驗するの重要なるを繰返すに外ならざる也、抑制家(社會主義の如き者に迫害を與へんとする者)は余の主意を以て、此れ權力法律勢力等にて苛酷なる迫害を加へらるゝを救助せんとする一面なりとせん、然らば彼等は己れ自らを誤解せるもの也、若し小數者――前々の論に於て常に改革者の小數なる理を說明せり――が眞理を探求し其成果を得んとする堅固なる自信を以て不調和物なりとせば、何故に多數者は然らざる歟、是の答解に二の主意を包有せん

(一)堅固なる自信は至醇なりとする信仰に外ならず

(二)至醇なりとなす信仰は偏狹心に羈絆せらる。と云ふべし



○想ふに此等の主意は的を逸して去ること遠し、孰れも眞理にあらず、吾人は遂次に之を論駁せん、堅固なる自信は至醇なりとする信仰にあらずして、誤謬に對する責任の觀念を以て成る、此の明瞭なる解譯は前の文士、サ

ミュルベーレー氏の述べしものあれば茲に引證せん、「勿論人の長く彼れの意見を抱持するは、其が正義なるものなりとの觀念あればなり、されど自れの說を眞如なりとなすと、信仰個條の眞理に大悟徹底せるとは大に異れり、人はある特殊の學說を視し時、其實體は一個美麗なる眞理なるも不似眞理的の觀念の來るを感せん、又彼が個々商量の公案として他人の意見を視し時も同樣の感あるべし、然れども彼は、地上には集合的に同一物ありて單獨なる事物なきを觀、人類の過去の歷史と現在の狀態とを觀、異れる時代と種々なる國民の信條、學派と團體と個



人との固有なる思考法を觀、今や排斥すべきものなるも嘗て有益なりし觀念、今や變化すべきものなるも一般に適用せられしことある偏情、幾多の哲人を攪亂して止まざりし爭論等を觀、更に彼と同樣に自尊せる幾多の同胞の考究せるもの等を詳査し來れば何人と雖、自己の意見も不實用なる誤謬の混合物にあらず、惡なるは其一部にして全體に善良、而も無限に大なる似實なるものなるを推知すこと易しと」

○此れ勿論如是感想の來りて如是の斷定を得ざる、又全

體的に他の集合意見と比較して自己の意見を形成し能はざる庸者の心の構造を記せるものにあらずと雖、往々第一流以下の人物が此等の自信を造出す、吾人は時代の氣風に骨子を樹立する爲に之を高く標致して、思想の源泉社會の木鐸連をして稱讃し、模倣せしむるの可なるを知りて未だ之を抑制するの可なるの理あるを知らず、彼は其論定せる意見を研讃して正義となし其を實現にせんとして多々益々辨ずるも、隻手其を保つを得ざらしむるに他の意見の其を排することを得るものあればなり、彼の排せらるゝに至るは彼の誤謬に就て合理的に發現せる自



覺の結果にして、是れ彼の寛容心を大ならしむるものにして彼の自信力を柔弱にし行爲を怠惰ならしむるの憂なきものなり

○次に醇なりとする信仰の一人のものなりと雖、以て偏狹たらしむるを要せざるものなり、たとへ己れの意義の純一無雜の眞理なるを需むるものなしと雖、特殊に於ては確に誤謬にあらざるものあり、故に其一部に堅實なるものは即ち加算の理によりて全體の純一無雜の眞理となると雖、抑へて以て狹隘となし小局となすを公義とする

の要なきなり、汝の意見中の眞理の堅利なるは獨立なり、人をして同道和唱せしむる方便品にあらず、辨難討究と權力とは此を別所に止めよ、然らずんば吾人は自由討究の漸く其根基を定めたる社會に於ては、道理上の弱者は辨難討究を好まずして、卑劣極まる迫害器械を握らんとするに至ると云ふを得べし(此器械に法的と數的とあり)、余の兄弟たれ、然らずんば余は汝を殺さんとの聲は。たとへ敬すべき兄弟主義の熱心者なりと雖、弱者たるの標示なり、權勢を以て人を沈默せしむる、只に人を更新することを能はざるのみならず、現社會を退歩せしむる不利



益を含有す、(一)社會の良心を減少し(二)僞善者を繁殖す、人の信念なるもの辨明を以て訓化するを得るも、權力を以てせる迷惑は之を斥くるに强固なる動機を有す、意見と權略とは元來別種に屬す、社會の俗的非難や法的手段を以て人の意見を破らんと考ふるものは、銃を以て星を撲滅し得となすもの、如し、法律によりて制定せられし觀念と、泛々として動き飄々として定めなき凡俗觀念に附加雷同する事は、先天的僞善者の如く、食劵を以て愛蘭貧民を新敎徒とし、首飾を與て野蠻人を基督敎徒とせし事と等しく一文の價値あることにあらず、善良なる

意見、思想、感情をば之を奬勵し、害惡なる思想をば之を妨止せんがために、法令權威を用ゆるは良法なりと論ずるは、表面眞なるが如くにして實は非なり、花紅柳綠、雪は白く氷は冷かなりと知るは智識の斷定せる處のものなり、雪は白しと曰へ、氷を冷たしとする行爲をなせしにより制定律によりて刑罰を加へ、人の行爲に及ぼすことを得るも尙白雪冷氷其信念は依然たり、此と同じく、道德上政治上其他何物にもあれ、意見と思想とが一度人心に形成せる以上は到底一の判決書にては其信念を變更することを得ざるものなり、故に狹隘政治の結果としては



只僞善者を增加せしむるに過ぎず、故に苟も自說を以て誤謬の混成物にあらずとなす卓越高亮の士は、自由說の生存せる所にありては。羅馬法王より新聞記者に至る迄。皆誰か此抑制を憎惡せざるものあらんや、唯之と反對なる一の理由は、人は自ら墮落するものにあらざるが故、進步策を講ずるの要なしとし、毫も企圖する所なき凡俗は抑制を加へらるゝ事なきが故。抑制の社會に與ふる害毒を知ることを得ざらんと云ふにあり

○人の意見主義等に就て毫も假借する處なき凡俗觀念の

由來は、間接には社會上の問題を法理上又は法律學的論法を以て律せんとするより來る、法律思想法は壓迫的にして。何事によらず行爲を先にして行意者の心意を後にするが故、即ち意見に就ての點檢を粗略にするが故、往々意見をも行爲と同樣に處分せんとするの傾向あり、同時に善動力ある意見をも壓迫し去るとあり、一方は權力の活用、一方は服從之れ法律的社會の標本なり、絶對的のものにして相對的のものにあらず、主權者と臣民、法制府と其法律の拘束する人々の關係を基本として成るものなり、此の法的思想は社會上尙未だ重要なるものなり



や、輿論を豐富にし社會を進步せしむるもの、此等の思想にあらずして進化思想なり、法律思想に多くの重要なる理由ありと雖、文化發達せる社會によりは、寧ろ未開なる社會に强制を以て貫徹せしむるものなり、法律罰例、拘束、壓迫、威嚇、公論に苛酷なる迫害を加る事、此等の條件に依りて結合し統一せる社會は文明社會にあらず、此等の術語は永久に存在せざるべし、何とならば社會の進步は有機的となり、特殊となり、一言すれば一層繁雜精密に發達するものなれば也、然則ち進化學の理想は社會を直接に觀察して發達の極致に至る唯一の條件、自由なる

ものによりて法律を改正せしむるにありと雖、其歴史的位置と實際的の部分は是を法律に委任せざるべからざるなり

○說を成果にせんとする堅固なる自信、以て他を制せんとする事と相結合せるものにあらざるを示さんがため、方便として自由論を點檢せざるべからず、其議論を精密にせんとして引證する無數の術語を去り、赤裸々に自由說眞個の基礎を示すは敢て難きにあらず、即ち社會は有機的構造にて成長發達すと云ふ觀念を以て社會を討究す



るにあり、是に依て主要なる敎科を作れば左の如し

(一)人は私的の範圍に於て現狀、又は偏情のために己れの意見と生存法とを献ぐる事なかれ

(二)たとへ强制の權力者と雖、吾人の意見と生存法とを犧牲にせんとすることある、必ずや之を拒絶せざるべからずと云ふにあり、術策を以て反對意見を實現せんとするを妨害するの權利ありと云ふ意義なりと說くものは自由の精神を知らざるものなり、雜多なる部類と精密なる有機體とを形成せる今日の如き社會に於ては理想、猶行爲も私的の範圍に放任して拘束せざるに根本的の利益あり、

其次第を述ぶれば、現在の理想と生存法とに時代に不適なる所あり、其實際の沈滯腐爛の狀態を誤りなく指摘するを得ずと雖、其腐爛の狀態あるを自覺せしにより、新意見新生存法とは其を現實にせんとして來るものなれば即ち彼等は社會成長の始をなすものと云て可なり、元來立法府なるものも如何なる新主義が眞價あり有益なるかは知り得ざるものなるが故、其全體を示さんが爲、社會に新主義の容易に出現し得る條件なかるべからす、勿論私的行爲に關する制限内に於てせざるべからずと雖、凡て如斯條件上社會は、自ら發達成長するに外ならず、さ



て其新主義が社會正格の發達と伴はず、病的成長に助勢する一文の價値なきものと雖、其根を拔かんとせば、(一)他の點に於て社會を退歩せしむること、(二)修理するを得ざる偏向の成長をなさしむ等のことあり、是れ重大なる危險にあらずや、吾人をして繰返して斷言せしめよ、社會の分類小分類、相關聯し、生產、商業、物質の排列等一層繁多なる社會となるに從て、明白に此等の危險は重大となるものなり

○前に論述せる如く、自由なるものは鐵道の平滑なるが

實際の力なる程にも實際の力あるものにあらず、されど一の條件あり、單に勢力として見れば之を稍極的勢力と云ふの眞義あれども、條件として見れば之れ確實なる積極的結果を生産するの要素なり、勢力より觀れば無能人のあらざるも、あらざるは勢力にあらずと雖、積極的運動には必要條件なり、反對の論證の如く勢力とすれば自由なるものに力なく、單に豫備的のものたるに過ぎず又條件を伴ふものなりと雖、其眞價に關係することなし、白痴人の無きも無きは消極なりと雖、身心堅固の人の活動するには有益なる條件ならずや、如斯く消極より積極



的成果を得るにあたりて、之が外部の干渉を排除するの一定の制限なかるべからざるに相違なし、然り此制限は種々なる思想家が種々なる點に付て規定す、吾人は茲に自由放任、思考、辨難、行動、勝手なりと云ふ第一等の根本的豫想を會得するにあらずんば、如何なる策士と雖、此復雜なる社會の制限を定むる良策なしと斷言す、是れ余の好愛せる私見の主意なり、直接にもあれ間接にもあれ抑制を以て自由を滅せんとする人に、先づ余の主意を打破せざるべからざるの責任あり

○自由の眞理を認むるに、しかく人の逡巡する次第を述べんに、第一に自由行動の利害如何を狐疑するものあればこそ他に其を認むるを畏るゝものあるなり、杞人の憂をして此に至らしめたるはは小心翼々たる政治家と抑制拘束を主張する辨護者にあらずして誰ぞ、文化發達せる社會には健全なる自衛性あり、此の自衛性を信ずるを得ざるは畢竟人間の無見識なるにあり、此れ一の理由なり、今日の如く進歩せる自由なる社會に於ては、宗教、道德、社會の諸主義等、他の法的權利と衝突すること少なく、迫害せらるゝを稀なるが故に沈滯腐敗するの憂ありと雖、其



を擴張發展して社會を害するの憂なきなり、然るに彼等各狐凝の態あるは眞個の自畫自讃の明智なきによる、此れ一般の理由なり、社會の元動力中には政治上經濟上の觀念ありて道德上智識上是非の念を制限し其他種々なる理由ありて社會を動かすこと決して容易なるものにあらず、茲に道道的理想を以て經濟上の事情を制すること、到底不可能に屬することの一例を示さん

○現代の社會と古代の社會との區別に、現代社會に奴隷の存せざるより明白なるはなし、社會的の變化として未

だ是より大にして又研究問題として是より趣味あるものなし、如斯、根本的社會變化の起りしは如何なる作用によりし歟、一般に答て曰く、基督教の訓化によりて、市民の心を變化せしめし結果にして、第一に純奴隷を農奴とし、農奴を自由勞働者としたる如く、敢て困難もなく容易に變化し來りしなりと、然り基督教の感化によりて、主人と奴隷、地主と農奴との關係を人道化し以て彼れ奴隷の被る災害を減少したるに相違なきものたりと雖、社會を一の有機體として考ふれば此變化をなすには、社會神經の大部分協力せずんば能はざるものにして、動物の



營養機關が、其一部のみ變化して全機關全組織に影響するをなき、所謂有限進化と異れるものなれば、基督教の訓化の有限進化に與へし所あるも、此社會の根本的大變革と異れるは明白なる事實なり、社會を動かす大汲動は經濟と物質にして其波及の不足なりしにより、奴隷を所有するは不合法なる歟、果して合法なる歟、等の人類關係問題が一般の人心に來らず、又奴隷を見る普通同胞の如き觀念の起らざりしが故、奴隷より農奴、農奴より自由勞働者と漸を追ふて來りし次第なり、以て道德上精神上の作用のみにあらざるを知るべきなり、奴隷廢止の公

義を主張するものは新教信者なれども同一なる新教者と雖、前代に於ては毫も嫌厭の情なくして奴隷を所有したりき、第九世紀、第十世紀の時代にありては、奴隷賣買は最も有利なる商業にして地中海邊に於て盛に營まれしものなり、歴史によれば、其以後の時代に於ても奴隷は歐洲人の主要なる貨物にして、アフリカ、シリア、イチブト等の諸國にて生産せる貨物と交換したるものなりき、如斯古代社會を破壞して奴隷を廢止せしめたるものは何ぞや、云ふ迄もなく人口の減少せると、富の減少したるに依り、市民生活の程度の降下せしため、主人と奴隷と



の差違少なく以て自ら奴隷なるものゝ存在せざるに至りしなり、吾人は是を歴史に視て、自然的更新あることを知るを得べし、羅馬の政府にては奴隷法を制定して國庫を豊かにせるにより同法を自由農民にも適用せんとせしが、歳入少かりし爲、貧弱なる勞働者をも奴隷と同樣にせることあり、如斯無法なる社會制度を革新せし主なる原因は、疫病と飢饉とありて莊田農奴の所有者を殺し、以て彼等の人口を減じたるによる、有名なる歴史家ヘンレー氏の言に據れば、奴隷の勞力にて耕作して利益ある土地にあつては、基督教の正義も人道の觀察も未嘗て奴

隷廢止に効果ありし事なし、基督教の社會に於て奴隷所有者の自ら好んで奴隷廢止を實行せし事なし、奴隷の勞力を以てせる生産物の價格の下落して主人に損害を與ふるに至りし迄、村落の奴隷の廢止せられし國あらずと

○此に因て是を觀れば抽象的理想の社會を動かすに至るは、其理想の性質の如何にも因れど其時と其所とに由るは明瞭なり、堅牢なる社會には破壞的狙擊を防禦するに充分なる勢力あり、完全なる有機體を組成せる社會には固有の保守主義あり、故に急進なる改革者が多々益々辨



ずるも眞に怖るべきこと極めて稀なり、如何に熱心に新理想を說教するも、社會にして甚だしき扞格齟齬の情況なき以上は些の影響を受くるものにあらず、既に沈滯腐敗に至れる社會にこそ、分裂的理想が企圖する處ろあるに至る、此問題の全體を審かにする、詳細精密の論法を要すと雖、玆に實例を取て略解すべし、羅馬帝國は何故に衰亡せるやの問題に付ては、其當時の小心者が信ぜし如く、尙未だ此の大帝國の覇權を穿ちて野蠻國とせるものは基督教なりと云ふものあり、然れども此が原因に二あり、(一)小原因は政治上の法則の邪惡、(二)大原因は財政

經濟上の組織不完全なりしが爲、一部落又一部落と逐次に貧乏にし終に人口を減少したるにあり、帝國破壞の機會を與へたるは基督敎なるも實際破壞せしものは基督敎にあらざるは注意する讀史生の等しく知る所なり

第十八世紀、佛國哲學者の破壞的評論が、古代社會の政治を顚覆せし大革命の動因なりとなすも前と同一なる誤解なり、此れ其動因は古代社會の政治法にして斷じてヴォーテル、デデロー、ルーソー等の學者にあらざるなり、當時の政況を見よ、農業の衰微、貿易の不振、財政の破產、平民と貴族の爭鬪、國家全機關の破損、此等の社會



に於て學者の著述を發賣禁止したりとて此等の破損の修理に何の益ありしとなす歟、かくの如く物質上には非慘なるものあり、政治上には絕望的なるものありしが故、國民の自覺より發生せる社會進步を發展するの他に方法なきによりて、彼等學者は抽象的政治論を主張し純理と自然法との單一なる主義を以て、善良なる政府を創立せんと說法せるに、國民が傾聽賛成するに至りし次第なり、今日より見れば、此の實際歷史上の社會改造を始むるに當り、其建築の礎石たる政略中に一の健固なる機關なかりき、斯の如き無謀の方法は災害を釀成するに至るべき

は瞭然として否定すべからずと雖、此策を取らざるべからざるに至らしめたるは古代の政治法にあらずして何んぞ

○前論に述べし如く學說の力の微弱なる、政治經濟の情況の完全なるありて社會の營養の佳良なる所に影響を與へ以て分裂せしめし事實の歷史上甚だ稀なるを知らん、然らば則ち國王は國家の督制者にして、又社會の權力者なれば、博愛主義を以てせば社會民俗を變體して絕對的王國を造ることを得べしとなすものありと雖、非常に困



難なる事業にして、又此社會を永久紛亂の禍中に投ずるの決心を以てせざるべからず、近世に於て此事業に從事せしものは、ジョセフ第二世を以て第一とす、然り帝は十分なる熱心を以てしたるも一の成果なかしは何ぞや、此理を知る難きにあらず、即ち人間なるものは毫も政治上の機械(參政權)を持たず、空手にて威嚇の下に働くことを得べきものにあらず、威嚇の屢々應用せらるゝ其度に從て、彼等相互に其不幸の感念を通じて益々災害を憎惡するの觀念を高昇して遂に罵倒するに至る、然らざれば單に一六勝負の心を有するもの多きに至る、熱心なる進

歩の使徒等も自ら祝福する善事をなすを得ざるに於ては、彼等が罵倒する所に如何に害惡あらばとて改革刷新に懶うかるべし、此れ、ジョセフ第二世の失敗せし所以なり、寛容なる國家に於ては人は社會の同化作用を信任し、彼の意見の容れられざるも怒らず、容れらるゝも誇らず、如何なる主義と雖、之を世間に與へて靜にして左右具に宜し、新なる主義と雖、新なるが故に害せられずして一時的實用あり、或は永久的眞價ありとして稱せらる、故に人々各々社會上の責任に付て鋭利なる感覺を有し、私的の行動をなすに當りて社會進歩の妨害たらざるを期す、



圓融無礙の境界となる、前に論せる改革者、即ち小數者も抑制せられずして却て歡迎せらるべしと雖、其が自然的障礙あり、何ぞや、舊思想は單に舊なるが故に生存することを得るも、必ずや、新者は然らざるなり、單に新なるが故に說明せる價値あるを多數の間に認めらるゝを得む

○社會自衛性を會得するは、討究的論證に勝るの直接動力となる、何んとなれば事物の秩序を掌どる人には以て、彼の勇氣と膽力とを增加せしむるに至ればなり、若し彼

等が單に自畫自讃の明智あるのみなる、其事物や、依然其主要たる適應調和の根基を有せず、其秩序や、依然震動しつゝある怪むべき秤器の上にあり、彼等の膽力は彼等と一般社會とに增加せる自尊心のみより來らずして凡ての討究問題が最も健固となり、一層實際となりて倍す、若し彼等が自ら大に憂とする所に大信念を樹立せんか、彼等の目して無謀の改革者となす者を了解し、調和し尙律するに寬大正當の適法を以てするに一層自由なるべし、最も適切なる例は議會にあり、一の提案に就て辨難討究するに自黨の議論には熱心なる贊成を表し、反對黨の議



論には暴言冷評して相互に缺點を發見せんとす、一の提案にして奇性にも一方には至善となり、他の一方には惡事となると雖、元來期する所は至善に止まり相互に威嚇して道理を騙取せんとするものにあらざるなり、此に因りて、を觀れば改革家は忍耐して道理に徹底せざるべからず、保守家は社會自衞力を信じて度量を大ならしめざるべからず、然るに保守家は答て曰く、人間なるもの人類關係に支配せられずして破壞的なる自利的欲情に驅らるゝものなり、而も其途に在るものと雖、未だ人類關係を知るもの稀なりと、讀者は此意見中の誤謬は、保守家

自身の判斷に任ずるならん

○吾人は此論に於て、吾人の說を成果にせんとする義務に就て、社會の條件に由りて定まれる制限を考究せり、大體の結論を一言すれば、健全なる主義は二の大政策を代表するものなりと云ふにあり、此大政策を時間的政策に一任するは利子を取て元金を與ふるが如し、吾人は即時一戰の勝利を安固にせんとせば他を殘害せざるべからず、他を殘害して未來を騙取せんよりは他の出現し盡す迄、吾人の理想の發進を止めて待つべきなり、新理想の



稀薄となり廢物となる程自信を滅し、主義を殺すべきにあらず、不實行の重任を擔ふて起つべきなり、是れ如何に觀じ如何に判ずるも、大利をして小利たらしむるもの也、是れ時代を貧弱にし高尙なる行動善美なる品性を失ふものにあらずして何ぞ

社會と主義終

明治卅八年三月四日印刷
明治卅八年三月七日發行

（定價十錢）

譯者　柴山由太

東京神田猿樂町二十五番地
發行者　若林鑒太郎

東京市京橋區日吉町十番地
印刷者　中村彌助

東京神田區猿樂町廿五番地
發行者　中庸堂書店

復製不許

中庸堂書店目錄

東京評論社編
●人道之偉人（各肖像入）　定價三十錢　郵税不要

東京看護婦會長　大關和子著
●派出看護婦心得（再版）　正價二十錢　郵税二十錢

高濱長江君著
●嗚呼亡友　定價二十錢　郵税二十錢

福田錠二君著
●處女の死と靈魂不滅　定價三錢　郵税二錢

佐藤紅綠君作
●惡魔評定　定價三錢　郵税二錢

吉村大次郎君著
●最近視察　苦學生の天國青年の渡米（五版）　定價二十五錢　郵税不要

加藤直士君譯
●英和對照ロバルトソンの美訓　定價二十錢　郵税二錢

松永文雄君編
●片岡健吉君傳　定價二十五錢　郵税四錢

94
342
Ⓜ

039592−000−2

94−342

# 社会と主義

ジョン・モーレー／著

M38. 3

BDA−0163